

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)

大学院学生研究

2021年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学研究科	英米文学 専攻
研究代表者 (2022年3月現在 のものを記入)	在籍課程・学年	氏名	
	<input type="checkbox"/> 博士前期課程 年 <input checked="" type="checkbox"/> 博士後期課程 2年	及川英	
指導教員	所属部局・職名	氏名	
	文学部・教授	新田啓子	
自然・人文 ・社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 ・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 ・ 共同 名
研究課題	Edith Wharton 作品におけるフェミニスト・リーディングの余剰—— <i>The Custom of the Country</i> を中心として		
研究組織 (研究代表者 ・共同研究者) ※2022年3月現 在のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年	氏名	
	文学研究科・英米文学専攻博士課程 後期課程 2年	及川英	
研究期間	2021 年度		
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 200,000円 / (採択金額) 200,000円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、*The Custom of the Country* を出発点として Edith Wharton 研究におけるフェミニズム批評の可能性と、その独自性を探ることを目的として計画された。本作品の主人公は、彼女との恋愛に夢中になる男性キャラクター達とは対照的に、彼女のセクシュアリティが不在であるかのように描かれる。これを主人公の無性愛傾向(アセクシュアリティ)と仮定すると、同作家作品における非異性愛規範的な性表象にこそ、女性表象や異性愛規範性への作家の独自の問題意識が表出するように思われる。そこで、既にクィア批評の視座から注目されていた同作家の幽霊物語を新たな研究対象とし、幽霊表象を、「クィアネス」という概念を援用することで、異性愛規範から逸脱する欲望の表出として分析した。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ Edith Wharton } { クィア・テンポラリティ } { セクシュアリティ研究 }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

1. 本研究の問題設定

本研究は、Edith Wharton 作品における女性表象やセクシュアリティ表象から、フェミニズム批評の可能性と、その独自性を探る大きな枠組みの内の一つのケーススタディとして、*The Custom of the Country*(1913)を第一のメインテキストとして扱うプロジェクトである。同作品の主人公 Undine Spragg のキャラクター造形の特異性が、彼女の無性愛傾向(アセクシュアリティ)にあると仮定することで、同作家作品の非異性愛的なセクシュアリティ表象の探求とすることを本研究のより具体的な方向性として定めた。同作家のセクシュアリティ表象を、「クィアネス」という概念を援用することで異性愛規範から逸脱する欲望や関係性、そして生のありかたの多様性を探求することを本研究の新たな目的として据えた。本研究におけるクィアネスとは、通常使用される同性愛的な意味のみを指すものではない。結婚・再生産を経験する生を前提とする異性愛規範から疎外されたあらゆるセクシュアリティや、生のありかたを指す。*The Custom of the Country* 研究を通して得た、Wharton のクィアネスという主題を深めるのに相応しいと思われる同作家の幽霊物語を夏季休暇以降、新たな研究対象に加えた。

Wharton 研究に端を発する本研究は、セクシュアリティ研究を軸とすることによって、昨年度より並行して研究を進めていた Nathaniel Hawthorne と Sherwood Anderson という二人の作家の研究とのテーマ的な繋がりをより明確することができた。セクシュアリティ研究やクィア研究を主題とすることで、これらのテーマを中心に扱い、複数の作家をケーススタディ的に取り上げるとい博士論文執筆に向けた包括的な研究の方向性を定めるに至った。特に Hawthorne の *The House of the Seven Gables* (1851) についての英語論文で援用した「クィア・テンポラリティ」の概念は、Wharton 作品における幽霊物語を読解するうえでも重要な示唆を与えた。Michael Warner などのクィア批評家は、結婚や再生産が異性愛かつモノガミーのセクシュアリティにのみ特権化されることを異性愛規範性(heteronormativity)と定義し、その特権性や、そこから排斥される事象を問う。クィア・スタディーズから派生したクィア・テンポラリティという概念は、2000 年代以降提唱されたものである。この概念は、異性愛規範性によって、人生において結婚・再生産などを始めとするライフイベントを経験することが期待されるという直線的な生の時間の規範が存在することを明らかにした。クィア・テンポラリティは、とりわけ、生殖中心主義へのアンチテーゼとして機能する。Lee Edelman は、つまり「再生産的未來主義」(“reproductive futurism”)を批判し、クィアネスとは、そのような再生産的未來主義の外部を指すと定義している。Wharton, Hawthorne, Anderson のそれぞれの作家研究の過程において、本研究ではいずれの作家の作品についても、生殖中心主義に抵抗しうる表象を取り上げており、クィアネスを本研究の鍵概念とし、体系的な研究を目指した。

2. Edith Wharton 作品におけるクィアネス

本研究の当初のメインテキストである *The Custom of the Country* においては、主人公の Undine の出産・育児の描写が極端に少ないことと、彼女の無性愛傾向に注目した。彼女の出産から息子が 3 歳になるまでの 3 年間の、本作品の語りは全く描かない。さらに主人公の育児への無関心も顕著である。申請当初は、彼女の育児放棄に着目することで、これを彼女の過剰な暴力性と捉えていたが、再生産する存在としての Undine を描くことを拒む語りは、むしろ彼女のアセクシュアリティと連関して考察可能なのではないかという仮説に至った。離婚と再婚を繰り返す、社会的上昇を目指すという本作品のプロットからは、主人公の奔放さや、強烈な上昇志向など、彼女の過剰さが特徴づけられるように思われる。しかし、男性キャラクターたちとのやり取りを精査すると、彼らが彼女に抱く愛憎とは対照的に、Undine はロマンティックな感情を彼らに見せることはほとんどない。たとえば、2 番目の夫 Ralph Marvell との新婚旅行先で、Undine が彼と身体的な接触をする場面は、おそらく作中最もセンシユアルに男女関係を描く場面でありながら、Marvell のほうは、ロマンティックな感情の高揚から、詩の創作意欲まで掻き立てられるが、Undine は、彼の詩的な言葉と身体接触に不快感を示し、身をよじる仕草をし、「ここは暑すぎる」と繰り返す。さらに、新婚旅行の道中、彼女が旅先の不快感とホームシックを泣きながら訴えたことも、夫婦生活への嫌悪を読み取ることができる。したがってこの箇所は、彼の性的な接触に対する彼女の嫌悪感の表出と、Undine のロマンティックな情感への無関心が表れているだろう。また、本作品は、女性主人公が結婚を繰り返すというセンセーショナルなプロットを提示するものの、性描写は Wharton の他作品と比較すると少ない点も注目し得る。Undine が出産・育児を経験しながらも、その過程を極端に描かない語りの戦略は、彼女の性愛への無関心と連動することで、彼女の再生産性が強調されることは決してない。彼女の性愛への無関心こそが、結婚と離婚を社会的地位向上の手段としてのみ捉えることを可能にしているのではないか。さらに息子への無関心は、親権を盾

研究成果の概要 (つづき)

に夫を強請るといった自己の利益の追求を可能にする。過剰なまでの野心や育児放棄など、彼女の「悪女」らしさを、ジェンダー規範への抵抗と読み取ることで家父長制批判を読み取る従来のフェミニズム批評に加えて、本研究ではこれまで言及されることの少なかった Undine のセクシュアリティの問題を精査した。家父長制に抵抗する「悪女」的なフェミニスト・モデルの造形を Undine から見出すのではなく、性愛への無関心、特に情緒的結びつきの忌避や、再生産のイメージの想起を意図的に避けるよう描かれる Undine は、異性愛セクシュアリティから遠ざけて提示されるかのようである。

3. 幽霊とクシアネス

The Custom of the Country 研究の過程で得た、女性キャラクターの非異性愛規範的な性質を見出す着眼は、Wharton の幽霊物語においても有効であると考え、研究の対象を主に“Kerfol”(1916)という幽霊譚にも拡大した。これまでも、“The Lady’s Maid’s Bell,” (1902) “Pomegranate Seed” (1931)など同作家の代表的な幽霊物語については、主人公が幽霊を見るという事象から、抑圧された同性愛的な欲望を見出し、異性愛規範への抵抗を指摘されてきた。作中に描かれる幽霊・あるいは死んだ前妻からの手紙などの超自然現象は、家父長制下の結婚生活で抑圧された女性キャラクターの抵抗や、同性愛的欲望の表出であるという解釈がなされてきた。加えて、“The Eyes”(1910)で描かれる血走った目の幻想も、このオカルト的な事象を通して男性主人公の抑圧された同性愛的欲望を提示する、同質のパターンの一つに数えられる。つまり、Wharton の描く幽霊とは、異性愛規範に対する何らかの表徴として解釈されてきた。“Kerfol”は、前述の著名な作品に比べて主だった言及をされることは多くないが、これら少数のうち本作品における超自然現象である「夫の Yves に殺された妻 Anne の愛犬の亡霊」について、本作に表象される「暴虐な夫と、抑圧される妻」という構図に基づき、父権的抑圧に対する作家の告発と抵抗の一例であるとの読みが展開される。しかし本作品に描かれる夫婦関係は、父権を行使する夫と抑圧される妻、というジェンダーの構図だけでは回収不可能な特徴を帯びている。対して本研究では、同作におけるセクシュアリティ表象の非規範性や、人間と動物といった種の不分明な関、そして物語内の時間・言語の混乱といった事象に注目し、その意味をクシアネスの枠組みから考察した。

まず、この夫婦関係に特徴的なのは、夫婦の不毛性と、パートナーの不在時に各々が抱く非異性愛規範的なセクシュアリティである。夫は前妻との間に子を設けた過去が明かされていることや、妻の大きな絶望から、この夫婦の不毛性は妻の側に原因があることが仄めかされている。夫は 17 世紀の貴族の家系の当主であるから、生殖至上主義は強固なはずであり、妻の不毛性は離婚の決定的な要因となるにも関わらず、彼は生殖能力のない彼女と婚姻関係を継続している。したがって、子を作れない妻との夫婦関係の継続は、当時の性規範と照らすと異質なものである。さらに、この夫婦の関係の特異性を明らかにするのが、夫から妻へのネグレクトと、夫が不在のベッドで行われる妻と犬との官能的な接触である。夫は商取引のための長い長く家を留守にし、帯同を望む妻を拒み、異国風の商業仲間とのホモソーシャルな関係に入り浸っている。一方、夫が不在のベッドで、妻は犬と眠るが、その姿は官能性を付与され、夫が犬に嫉妬し殺害してしまうことから、犬が妻にとっての性的な親密さを抱くパートナーであることが示唆されている。彼らの異性愛規範的な夫婦関係からの逸脱によってもたらされる、犬と人間という種の関の混乱を示すほか、ブルターニュ地方の貴族である Yves のエキゾチックな商取引は、文化的な混淆を提示する。

このように、物語の舞台である Kerfol 邸は、夫婦の生殖のための空間としての家庭ではなく、人間・動物間の種の不分明な官能性を実践したり、文化的な混淆を体現したりする物質の終着地点として機能する。本来、結婚・再生産などの秩序の不可侵な空間であるはずの家庭が、むしろ、混淆の場として逆転的に立ち現れる。加えて、この物語内の多層的な言語の問題も同様に、境界の関を混乱させる重要な一要素である。17 世紀ブルターニュ地方で起きたとされるこの物語は、現在の英語話者である語り手がフランス語で記された法廷記録を翻訳し読者に提示されたものである。つまり本作品はブルターニュ方言、フランス語、英語へと二重の翻訳と、およそ 300 年という時間が Cornault 夫妻の出来事から語り手が物語るまでの間を隔てている。今年度の本研究は、作中のセクシュアリティ、言語、時間といったあらゆる関の混乱を指摘するまでに留まってしまったので、多層的混淆の要素を概念的に統合していくことを今後の課題としたい。

※この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて研究成果報告書提出フォームより提出してください(紙媒体等、研究成果報告書提出フォームから提出できない場合は、別途リサーチ・イニシアティブセンターへ提出してください)。

- ① 雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ② 図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③ シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④ その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

※修士論文・博士論文は含みません。

① 雑誌論文

- (1) Oikawa, Ei. "The Patchwork Family: Queer Temporalities in Hawthorne's *The House of the Seven Gables*." *The Journal of the American Literature Society of Japan*, no. 19. 2022.pp. 1-17. (査読あり)
- (2) 及川英

② 該当なし

③ 該当なし

④ 学会発表

- (1) 及川英、「Edith Wharton, *The Custom of the Country* におけるフェミニスト・リーディングの余剰を読む」、日本英文学会第93回大会、於 早稲田大学、2021年5月22日 (口頭発表、審査あり)。
- (2) 及川英、「境界からの遡行——Edith Wharton の幽霊物語におけるクィアネス」、2021年度立教大学英米文学会、オンライン開催、2021年12月18日 (口頭発表、審査なし)。